

氏 名	たかの 野 晃 兆
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 539 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	E・トレルチの『キリスト教の諸教会と諸集団の社会教説』について ——《社会学的基本図式》から見て——

論文調査委員 (主査) 教授 片 柳 榮 一 教授 藤 田 正 勝 准教授 芦 名 定 道

論 文 内 容 の 要 旨

Ernst Troeltsch, Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen, 1912〔以下『社会教説』と略す〕と言えば、「教会」、「セクト」、「神秘主義」の3類型を誰もが思い浮かべる。

しかし『社会教説』が最初 Archiv fuer Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd.26, 1908 に発表されたときの「序論」では重要な概念は社会学的基本図式だけであった。拙論の第1章第3節「《社会学的基本図式》の意味」の内容を先取りすれば、この語は「人間の生の関係の基本図式の理想」、筆者の理解で表現すれば、共同体内の人間関係の理想を意味する。この概念が教会やセクトの根底にある。これは重要な概念なのである。従って、3類型だけを取り上げるのではなくて、それらの根底にある社会学的基本図式を入れて4概念がまとめて論じられなければならない。しかし3類型は今まで多くの研究者によって十分に論じられたので、特に社会学的基本図式に焦点をあて、拙論はこの概念を軸に展開される。

序章 トレルチ研究史における《社会学的基本図式》の考察の過程

トレルチの死後の早い段階で社会学的基本図式の問題にしたのは Heinz-Horst Schrey, E. Troeltsch und sein Werk (ThR,NF 12, 1940) である。しかしシュライは福音のトレルチ解釈に異議を唱えるためにこの概念に言及したのである。次に Walther Koehler, E.Troeltsch, 1941 である。彼は内容的に触れているが、これが重要な概念であるとは言っていない。

社会学的基本図式を重要な概念だとして取り上げたのは Manfred Wichelhaus, Kirchen-geschichtsschreibung und Soziologie im neunzehnten Jahrhundert und bei Ernst Troeltsch, 1965 である。トレルチはマルクスの上部構造・下部構造論を相対的な意味で受け入れた。この下部構造に突き刺さっている「ある特定の、その当該の文化圏固有の心的特質」(GS III, 350) があるとトレルチは言う。この心的特質こそ社会学的基本図式だとヴィヘルハウスは言う。この指摘に引き続いて、ヴィヘルハウスは社会学的基本図式に言及している。しかしヴィヘルハウスの上記書物は3類型を軸として展開され、社会学的基本図式は3類型に添えられているにすぎない。高野は根底にあるこの概念が最も重要な概念だと主張したい。

ヴィヘルハウス以後では、Hans-Georg Drescher, Ernst Troeltsch, Leben und Werk, 1991 も Wolfgang Stegemann, Zur Deutung des Urchristentums in den >>Soziallehren<< (in : Troeltsch-Studien 6, 1993) も社会学的基本図式に言及しているが、深く論じていない。

社会学的基本図式の重要性を示唆しているのは RGG 第4版のトレルチの項の執筆者グラーフである。しかし紙面の制約上、示唆に留まっている。

第1章 研究を進めるに当たって

一番重要な「《社会学的基本図式》の意味」は最初に先取りして言及された。次に重要なのは社会学的基本図式と3類型との関係である。社会学的基本図式は各時代の根底にある理念であって、3類型は社会学的基本図式の上部構造である。

第2章 古代教会

福音の根本思想と社会学的基本図式。イエスの説教の根本思想は神の国の到来を告げることである。神の国が到来したときに神に顔を合わせることができる人は心の純粋な人である。心が純粋であれば、神と顔を合わせるのに祭司も教会も不要である。トレルチはこの根本思想から社会学的基本図式を引き出している。トレルチはこの神直接性を絶対的宗教的個人主義と呼んだ。次に、心の純粋な人たちが神を中心として共同体をつくる。この共同体の成員、つまり神の子は皆兄弟である。この共同体のエートスは普遍的人類愛である。これをトレルチは絶対的普遍主義と呼んだ。従って福音の社会学的基本図式は絶対的宗教的個人主義と絶対的普遍主義である。

パウロゲマインデの成立と社会学的基本図式。キリスト教とはパウロの信仰においてキリストの言葉への信仰ではなくて、キリストの霊への信仰となる（GS II, 416）。神の国を待ち焦がれているイエスの信者の流動的なゲマインデがイエスが霊と解されることによって非常によくまとまった独立した宗教共同体となる（GS I, 58f.）。この祭儀ゲマインデの形成によって祭儀ゲマインデの加入が救済の条件となることによって福音の神直接性、即ち絶対的宗教的個人主義が狭隘化される。現世の不平等を克服するために、またコリントの教会に見られるように生身の人間の共同体には指導・助言が必要であるので、家父長主義という理念が持ち込まれる。この家父長主義は縦の関係であるから、共同体の構成員は皆兄弟という福音の絶対的普遍主義が狭隘化される。

初期カトリシズムと社会学的基本図式。初期カトリシズムと呼ばれる時代になると、祭儀に対する統一的理解が必要とされるようになり、祭儀が組織化されるようになる。司教や聖職階級がつくられることによって神直接性の宗教的個人主義はパウロ時代よりも一層狭隘化される。また聖職階級と平信徒という身分がつくられることによって共同体の構成員は皆兄弟という普遍主義が更に狭隘化される。この身分化され、それぞれの身分に活動の枠が設けられ、活動が制限されることを有機体の理念が持ち込まれたとトレルチは言う。

第3章 中世カトリシズム

ゲルマンの領邦教会における霊的なものと現世的なものとの相互浸透。中世はキリスト教的理念に導かれて形成された、と解釈する神学者たちがいるのに対し、西ローマ帝国の崩壊によって西ヨーロッパ世界は何の目的もなく中世に雪崩れ込んだとトレルチは解釈する。現在のフランス、ドイツの地にゲルマン民族が移動して来たとき、多数のキリスト教ロマン系民族がいた。ゲルマン人は彼らに危害を加えず、共に定住した。ゲルマンの族長の一人クロヴィスはキリスト教徒クロデヒルデと結婚、彼自身も洗礼を受けた。従って、教会側はたいした努力をせずにゲルマン民族のキリスト教化が行われたのである。

ゲルマンの諸国家においては国家が教会を領邦教会として管理した。また文化なきゲルマンの諸国家は文化の形成のために古代文化を継承しているキリスト教の協力を必要とした。このことによって霊的なものと現世的なものとの相互の内的浸透が行われた。

普遍教会運動と教會的統一文化の成立。10世紀以来、普遍教会運動がロマンス世界から起こって来る。この運動は教会側の努力である。この運動の社会的成果は、(1)教皇への権力の集中化、(2)教会の国家からのまた国家の上に立つ自由、(3)サクラメントと恩寵の教義による人々の心情の教會的支配、である。教會的統一文化がかくて達成される。

社会学的基本図式。初期カトリシズムに始まるドグマ、祭司制度、サクラメントによる差別化の形成は祭儀共同体を完全に有機的組織化した。他面、教会外の社会形成物に属することによる差別が祭儀共同体に持ち込まれる。こういう差別に対してキリスト教の社会理念は家父長主義を用いた。かくて有機体の理念と家父長制の理念が中世の本来の《精神》として発展させられる。

第4章 ルター並びにルター派の社会教説

ルターの宗教理念と社会学的基本図式。ルターは律法に対して恩寵を主張したというよりは、恩寵とは何であるかを問うた。恩寵とはサクラメント的に注がれる神秘的な奇蹟の実体ではなくて、福音とキリストの愛と心術において人間にとって認識可能な神の愛の意志である。このことのうちに宗教的個人主義がある。神との交わりに祭司を必要としない。原始キリスト教的万人祭司制と平信徒宗教の復興である。平信徒宗教の復興であるから、キリスト教徒は皆兄弟、即ち普遍主義の復興となるところであるが、ルターの保守的な性格のゆえに家父長主義が存続する。

ルターの宗教理念の社会的諸帰結。ルターの思想によれば、〔神の〕言葉とサクラメントが存在するところに、教会が

存在する。そして〔神の〕言葉に政府も国民も従うという超理想主義的信仰をルターは持っていた。トレルチはルターの問題点をここに見出す。具体的には、ルターが教会の秩序維持を領邦国家に任せたことにある。領邦国家は武力を用いて教会に干渉した。その結果ルター派の信徒は殻のなかに閉じこもる。

ルター派の社会学的基本図式。ルターと同様宗教的個人主義と家父長主義であるが、この宗教的個人主義は殻のなかに閉じこもっているという意味での内面的である。

第5章 カルヴィニズムの社会教説。

宗教・倫理思想と社会学的基本図式。カルヴィニズムの宗教・倫理思想において第一に重要なものは予定説である。第二に取り上げられるのは宗教的個人主義である。カルヴィニズムにおいては被造物の至福ではなくて、神の名誉が中心であるように、行為によって神を賛美することが宗教の個人的・人格的真正さのテストなのである。カルヴィニズムにおいては個人は至福のなかで休むことで満足するのではなくて、現世の秩序の中に入り、この秩序に精神的に優位な立場に立って、この秩序を神の意志に適うように形成しなければならない。

カルヴィニズムの考えでは国家教会単位に全生活がキリスト教化されなければならない。そのような国家教会が互いに連携する。特に、ジュネーヴという小都市の置かれた国際政治上の不安定な状況の故にカルヴィンはプロテスタントの諸勢力との連携を必要とした。従って国際的な連携が社会学的基本図式の一つとなった。国家教会単位でキリスト教化することをトレルチはキリスト教社会主義と呼んでいる。

かくてカルヴィニズムの社会学的基本図式は1) 宗教的個人主義、2) キリスト教諸民族の団結、3) キリスト教社会主義、である。

古カルヴィニズムから自由教会制とピエティズムという形をとった新カルヴィニズムへの移行。前者は完全にカルヴィニズムの運動であり、後者は英国国教内の運動である。前者をトレルチはジュネーヴの基盤から理解せず、英国教会より脱退して会衆教会を建てた会衆教会主義のうちに求める。それに対してピューリタンの・ピエティズム的運動を英国国教会の中のカトリック的要素への攻撃のうちにトレルチは求めている。彼らは国教内に留まって国教内に小さいサークルをつくることもできたが、それに満足できない人たちは非国教徒となって活動の舞台を新大陸に求めた。この自由教会運動やピューリタンの・ピエティズム的運動の形をとったカルヴィニズムをトレルチは新カルヴィニズムという。

第6章 禁欲的プロテスタンティズム

社会学的基本図式。新カルヴィニズムが再洗礼派等のセクトと融合し、或いは神秘主義と接触することによって禁欲的プロテスタンティズムという大勢力となる。古カルヴィニズムが国家教会制であったのに対して、自由教会制である点、教会や牧師を選べる点で、より徹底した個人主義である。

禁欲的プロテスタンティズムは職業を恩寵身分の確証の手段とした。禁欲的プロテスタンティズムは職業労働を神の栄光のために方法的に形成した。これが禁欲的プロテスタンティズムの倫理理想である。従って教会形態では新カルヴィニズムと古カルヴィニズムは異なるが、倫理の面では繋がっている。

最終章 社会学的基本図式の意義

キリスト教思想史或いは教会史を通覧しても、全体としてキリスト教はどのような方向へ向っているのか判断するのがむづかしい。それに対して、社会学的基本図式の《まとめ》(当要旨では省略)をみると、キリスト教の根底にある理念の動きが明らかである。

《まとめ》を見て、まず気がつくことは、中世カトリシズムの異質性である。この中世カトリシズムから宗教改革への移行行きは前へ進んだのか、福音へ帰ったのか。トレルチはどのように解しているか。トレルチはGS II, 418において「〔キリスト教の〕本質は……生の目標と価値を自らのうちに保持し、そして一貫した形でかつ適応しながら〔自己を〕展開する精神的推進力である」と言っている。この考え方と社会学的基本図式の「まとめ」ををにらみながら考えると、社会学的基本図式が福音へ帰っていくと言うよりは理想的な形態へ向って進んでいくと考えなければならない。そしてキリスト教の本質が「〔自己を〕展開する精神的な推進力」であるが、これはたえずエネルギーを補給されなければならない。エネルギーの補給の仕方には二通りある。

キリスト教に推進力を与えることができるかどうかは「キリスト教をなお力尽きることのないそして未来に対して更に働

きかける、不滅の宗教的な力と見做すか、或いはキリスト教を一時的に力を持ったが、すでに解体が始まっている宗教的生と見做すか、によって答えは非常に異なってくる」(GS II, 424)とトレルチが言っているように、キリスト教徒自身が前者の気持ちにならなければならない。

もう一つはキリスト教では教会に対してたえず批判的な精神、即ちセクトや神秘主義が存在し、これがキリスト教の宗教的生命の枯渇化を防いできたのである。

社会学的基本図式の《まとめ》を見ていると、このようなことが次々と思ひ浮かんでくる。このことがこの《まとめ》のもつ意味なのであろう。

論文審査の結果の要旨

ドイツの神学者・宗教哲学者E.トレルチはM.ヴェーバーと並んで、人間の意識や理念などの上部構造と経済的下部構造との関わりの問題に格闘した思想家として著名である。その主著である『キリスト教の諸教会と諸集団の社会教説』(以後『社会教説』と記す)は、古代、中世、近世におけるキリスト教諸集団が、如何に社会についての自らの理想を、歴史的に置かれた厳しい現実の中で構想し、貫徹し、妥協していったかを詳細に叙述したものである。二十世紀の初頭に書かれたこの書は、キリスト教の将来への処方箋をも含むものとして、注目され賛否両論の激しい議論を呼び起こした。しかしその後の弁証法神学の隆盛はトレルチを過去の存在に追いやってしまったが、西欧キリスト教世界の世俗化の問題が顕著になった七十年代から、西欧社会を歴史的に形成してきたキリスト教の将来を醒めた眼で問うてきたトレルチが見直され、トレルチ・ルネサンスとも言える再評価の機運にある。日本でもトレルチはヴェーバーとの関係でよく知られているが、この『社会教説』そのものに関して本格的な研究はあまりなされてこなかった。この書の古代教会の部分の翻訳出版をすでに終えた論者はこの千頁にも及ぶ大著に関して正面から、そして新しい視点から取り組んでいる。その論考の意義は次の諸点にまとめられる。

I 従来『社会教説』は、そのうちで展開され有名になった、教会、セクト、神秘主義という三つの基本類型(タイプ)から総じて論じられてきた。教会タイプとは、社会の統合の中心に宗教を置き、社会の全成員に同じ宗教を行き渡らせるよう求めるもので、最も典型的なのは中世カトリシズムであり、プロテスタントではルター派とカルヴァン派がそうである。セクトは信仰の純一さを最重要と考え、少数集団に甘んじて、信仰の同一性を保とうとするものである。神秘主義は個人の独りなる覚知を重んじ、集団形成には無関心なままである。論者によればしかし、トレルチはこの区別の前提にそれぞれの集団のもつ「社会学的基本図式」というものを考えていた。それは「人間的生の関係一般の普遍的な基本図式」の理想、真に宗教的な共同体或いは教会の境界を越えていく理想である。この前提のもとに、トレルチが類型を取り出していることに論者は注目し、これまであまり注目されてこなかったこの「社会学的基本図式」に焦点をあててこの大部な書を読み解こうと試みている。このことの意義は大きい。これまでの研究史においてもわずかに1965年に出た研究書のなかでヴィッヘルハウスがこの点に注目している程度であり、この視点からの切り込みにより新たなトレルチ像を描きうる可能性を論者の主張は示している。

II 論者はそれぞれの時代の主要な社会教説の担い手の根底にトレルチが見る「社会学的基本図式」を改めて浮彫にする。イエスの福音の根底にある「社会学的基本図式」は絶対的個人主義と絶対的普遍主義である。この個人主義からトレルチがキリスト教の基本的特徴とみる人格性の尊重が導き出され、普遍主義の背後に愛による社会的連帯という特性が導きだされるのであり、この二つの社会学的基本図式は以後のさまざまな社会教説の主張に規範的意義をもつことになるかと論者は考える。

III 歴史上の三つの教会タイプの代表、カトリシズム、ルター派、カルヴァン派の特徴も、論者によれば、社会学的基本図式の視点からトレルチは次のように取り出しているという。中世のトマス思想に代表される、パウロから引き継いだ家父長主義と、古代教会から引き継いだカトリシズムという社会学的基本図式により、現実の社会の不平等などの諸問題を克服しようとする。ルター派はルターの深い信仰義認の理解からカトリシズムの位階性に基づく有機的組織の基本図式をとらず、万人祭司的宗教的個人主義に復帰しているが、共同体生活の諸条件に愛からのみ服従しようとする心術主義は、現実の社会の問題性を家父長主義により克服しようとして、この図式をカトリシズムの如く残している。カルヴァン派はルター派と同

様宗教改革の基本的特徴としての宗教的個人主義を主張し、有機的組織の図式より抜け出ているが、ルター派以上に人格的価値の自覚が強く、家父長主義ではなく、各人が神的権威により連帯する保守的な民主主義を可能にするキリスト教的連帯性が社会学的基本図式である。主要な教会タイプの宗教集団の特徴も、社会学的基本図式を明確化することにより、より明瞭に描きだされうことを論者は明らかにしている。

Ⅳ 一つの宗教が社会の統合の中心となることを目指す教会タイプのキリスト教は政教分離を原則とする近代社会においてはすでに命脈が尽きていることをトレルチは冷厳に見つめる。しかしトレルチは単なる近代の合理主義的個人主義も全体的社会主義も真に生き生きとした社会を形成するには不十分であることを見逃さない。キリスト教の原点としての社会学的基本図式の「絶対的個人主義」による人格性の尊重と「絶対的普遍主義」による社会連帯によって生き生きと保たれる社会の形成を基本課題とする将来のキリスト教の姿をトレルチが求めていたことを論者は示唆し、社会学的基本図式の意義を改めて明らかにしている。

このように社会学的基本図式からトレルチの『社会教説』を読み解こうとする論者の試みはトレルチ研究の新たな可能性を示しているが、「社会学的基本図式」という概念の論者自身による厳密な定義づけがなされていないため、論述を分かりにくくしているところが見受けられる。トレルチ自身様々な表現で言い換えている含蓄あり複雑な内容をもった概念であるが、明確化へのさらなる努力が求められる。しかしこのことはこの論文全体の価値を著しく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十年二月二十一日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。